

Student Voice

[学生の声]

チーム全体で活動する中で自分の役割を果たす責任感を強くもつことが出来ました。話し合うときも皆がいることで、自分では思いつかないようなアイデアをたくさん発見することができ、チームの意義を感じました。
〈もやいすと(地域)ジュニア育成 受講生〉

私はサブリーダーという役職を引き受けました。「もやいすと」はそれぞれ学部、サークルなどが異なるため、途中で協力して物事を行うときに必要なことを多く学べたと思います。
〈もやいすと(地域)ジュニア育成 受講生〉

震災に対して大学生ができることは多くないと思っていましたが、問題点を洗い出すことで、私でも出来るような解決策を見つけることが出来ました。実際に震災を経験した今年だからこそ学べることも多かったように思います。
〈もやいすと(防災)ジュニア育成 受講生〉

他学部やシニアの先輩達から色々な視点でアドバイスを貰い、内面が成長したように思う。震災を経験したからこそ話し合え、分かり合えたことがあったので、このプログラムは後輩や地域、そして家族にも伝えたいものになった。
〈もやいすと(防災)ジュニア育成 受講生〉

シニアの授業を受講して、多くの人と出会い、チームで動くことの大切さを改めて感じた。シニアは、「講義を受ける立場」と「講義を作り上げる立場」の二役を担っている。講義を作り上げる中で、ジュニアに学んで欲しいこと、望んでいることを考え、分析した。ジュニアの成長が私の成長に繋がったと思う。
〈もやいすとシニア育成 受講生〉



大津 龍司
(総合管理学部)

私は高校の時から、「もやいすと」プログラムに興味を持っていました。実際に受講してみて、班のメンバーとの繋がりを作ることも出来たし、良い経験になったと思います。
〈もやいすと(地域)ジュニア育成 受講生〉

正直こんなに「もやいすと」に一生懸命になるとは考えていませんでした。今回このメンバーで「もやいすと」に取り組めたことは本当に良い経験になり、自信にも繋がりました。今回経験したことは、これからの進路に生きてくると思います。
〈もやいすと(地域)ジュニア育成 受講生〉

この講義を通して得たものは二つあり、一つは人間関係の幅であり、もう一つは人と考える能力だと思ふ。決して交わることのなかった5人が、様々な考えを出し、それらを自分の考えに取り入れることができるようになった。
〈もやいすと(防災)ジュニア育成 受講生〉

少し積極的になれたと思う。今までは人の役に立つとか、誰かを助けるボランティアなんて自分にはできないんじゃないかと、やりたくても行動に移せなかったりした。自分にもできることがあるんだということ、「もやいすと」を通して学び、ボランティア活動に参加するようになった。
〈もやいすと(防災)ジュニア育成 受講生〉

ジュニアとの関わりを通して、自信を貰ったことが私にとって大きい。ファシリテーターの私が話すことによってその場に笑顔が生まれ、より話しやすい雰囲気となってくることがとても嬉しかった。シニアの授業から人を支えるということを学ぶことが出来た。今回手に入れた自信を今後も活かして行きたい。
〈もやいすとシニア育成 受講生〉



久保田 千晴
(文学部)



文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)

震災復興に向けた「もやいすと」育成プログラムの展開 —熊本県立大学が挑む「復興教育」—

平成28年度 成果報告書



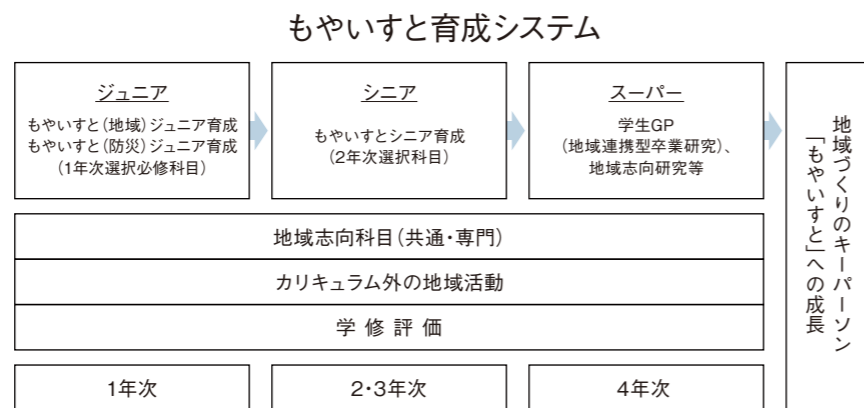
2016

震災復興に向けた「もやいすと」育成プログラムの展開 — 熊本県立大学が挑む「復興教育」 —

熊本県立大学では専門分野の枠を超えて地域づくりの中心となる人材を育成するため、平成17年から「もやいすと(※)」教育を展開しています。平成27年度より1年次選択必修科目「もやいすと(地域/防災)ジュニア育成」、2年次選択科目「もやいすとシニア育成」を新規開講し、環境や観光、防災などの課題について、グループワークを中心とした授業を行ってきました。

今年度も同様のカリキュラムを予定していましたが、4月に発災した熊本地震を受けて急遽、教育プログラムを見直すことになりました。震災復興を下支えし、熊本の未来を担う人材育成を主軸とした「復興教育」へとプログラムを転換。「1年生全学必修」の科目「もやいすとジュニア育成」の受講生で5人1組のチームを組み、「もやいすとシニア」がファシリテーターとなって、仮設団地における支援活動や防災講習などを実施しました。今後も、熊本の震災復興と地域の発展に関わることでできる人材の育成に向け、さらなる取り組みを続けてまいります。

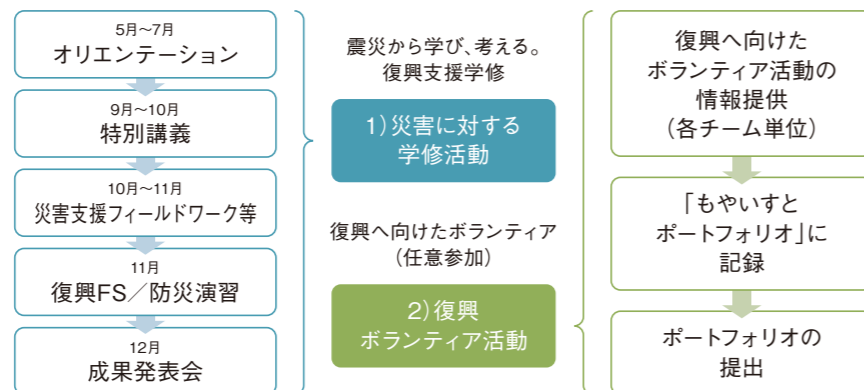
※もやいすと…熊本の自然、文化、社会を理解し、専門分野の枠を超えて地域づくりの中心になれる人材(県立大学の造語)



平成28年度もやいすとジュニア育成プログラム

「もやいすと2016」(熊本県立大学復興支援チーム)

1年生約**520**名が、5人1組の**104**チームに分かれ熊本の復興支援に取り組む!



G

Greetings

[ご挨拶]

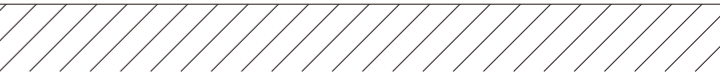


総合管理学部 教授
全学教育推進センター長
副学長
もやいすと(地域)ジュニア育成、
もやいすとシニア育成 担当教員

津曲 隆

本学は、熊本県内から多くの入学を受け入れ、そして卒業生の多くを県内へと輩出する、“熊本”と強く結びついた大学です。本学が、熊本という地域を題材に教育を展開していくことはごく自然な流れでした。その代表が「もやいすと教育」です。もやいすと教育は、平成27年度に新たなカタチへとリ・デザインし、すべての学生が熊本の地で課題と向き合い、アクティブな学びを促す先進的な授業としてスタートさせたところでした。その2年目に熊本地震が発生しました。

大学を復旧させていく中で、もやいすと教育が熊本地震と無関係であることはあり得ないと考え、今年度は熊本地震からの復興をテーマに、約520名(104チーム)が地域課題に挑む内容としました。ただ、被災地の状況は時々刻々と変化します。学生たちには臨機応変な対応を求めました。その緊迫感は学生たちに強いリアリティをもたらすことになりました。104チームの学生すべては真剣に地域と向き合い、優れた成果発表に至ったのです。五百旗頭理事長が、地震後、学生に「若き日に熊本地震を体験した諸君にとって、何を大事にして生きるかを考えるよき機会ではないかと思う。」とのメッセージを寄せられています。もやいすとチームによる復興支援活動は、学生が地域を考える「よき機会」となり、熊本の復興そして地域の発展を支える人材育成につながったと確信しています。



環境共生学部 教授
地域連携・研究推進センター長
もやいすと(防災)ジュニア育成 担当教員

堤 裕昭

今年度は、これから1年生の約半分の学生が受講する「もやいすと防災」という選択必修科目を円滑に展開できるように準備を進めていた矢先、4月中旬に予想だにしない大震災に見舞われて、授業計画を根本的に見直すことになりました。しかしながら、科目名が示すように、その内容は本学のカリキュラムの中で震災と最も関係性の高い科目の1つです。すでに起きてしまった災害ではありますが、その被害や影響を最小限に止め、どのように地域社会を再興していくのか。それを学び、考え、実行し、次なる災害への備えを学生個人々に蓄えることは、災害の多い日本に生きる若者に不可欠のことです。突然の出来事で、何から手をつけて良いのか、試行錯誤の続く授業となりましたが、この授業を通して、受講生の皆さんが自分の意見を述べ合いながら成長していく姿を見て、この科目の重要性をあらためて認識することとなりました。この科目の受講生は、自分と社会の関わりを認識し、個人の幸福を追い求めるだけでなく、社会に貢献する人材となることの重要性を理解したと確信しています。また、そのような人材として社会で活躍していただくことを願っています。

最後に、この科目を展開していくためにご協力いただいた熊本YMCA、日本赤十字社熊本県支部、熊本地方気象台および益城町の関係者の皆様方、益城町の仮設住宅の住民の皆様方、ならびにボランティアの皆様方に、深く感謝申し上げますとともに、震災を受けた地域の創造的な復興が実現していくことを祈念し、結びの言葉とさせていただきます。

Report

[活動報告]

「復興へ。 もやいすとジュニア520人で挑む熊本地震」

もやいすと(地域/防災)ジュニアの活動

2016年度の「もやいすと(地域/防災)ジュニア育成」、1年生約520人の全学必修科目としてスタートしました。5人1組のチームを編成し、当初は避難所を中心に活動を進めていましたが、時間を追うごとに変化する被災地の現状に沿って、被害の大きかった益城町のテクノ仮設団地などへ活動の場を移しながら、災害支援フィールドワークを実施していききました。学内外の専門家や被災者との交流などを通じて、復興へ向けた課題の抽出とその解決方法を探求しました。

12月に開催した「成果報告会」にはもやいすとジュニアが全員参加し、プレゼンテーションでは、各チームごとに今年度の復興教育の成果が発表されました。

実際の活動について

◎オリエンテーション

(5/30、6/20、6/27、7/18、7/25、10/10)



複数回にわたるオリエンテーションで、チーム作りや役割分担、もやいすとポートフォリオの作成と、チームビルディングを行いました。

3回目のオリエンテーションでは、復興ボランティア活動に関する情報提供を行うとともに、本プログラムのファシリテーター役となる「もやいすとシニア」との顔合わせを実施しました。「復興へ。もやいすとジュニア520人で挑む熊本地震」の本格活動をスタートしました。



◎災害フィールドワークおよび特別講義

(9/29、10/15、10/22、10/30、11/6、11/19、11/20、12/3)



災害フィールドワークでは5人1組の班のメンバーが、それぞれ4つのプログラムを選択受講するジグソー学習形式をとりました。当初から避難所運営に携わっていた熊本YMCA、仮設団地の住民団体、KASEIプロジェクトなどの協力を得て、多彩なフィールドワークのほか、熊本地方気象台等による特別講義も受講しました。受講後、参加メンバーらが引き継ぎシートを作成し、班内引き継ぎを行うことで、多くの学びを共有することができました。

避難所となっていた益城町総合体育館の見学をはじめ、テクノ仮設団地の「益城だいすきプロジェクトきままだ」の協力のもと、地震直後から避難所、そして仮設団地における現状などの講話を聴くフィールドワーク、仮設住

宅の1/40模型の製作や居住環境学科の学生が手がけた実寸大の仮設住宅の体験会などを通じて、仮設住宅の課題を探る演習などを行いました。



◎復興フューチャーセッションおよび防災演習 (11/23)

「地域ジュニア」「防災ジュニア」の計520名が一堂に会した復興フューチャーセッションでは、仮設住宅の暮らしを快適にする方法について、さまざまなアイデアが飛び交いました。また、防災ゲーム「クロスロード」では、もやいすとシニアが考案した熊本地震版の二者択一の問いについての回答と意見交換を繰り返し、災害対応のジレンマや、少数派の意見を受け入れることの大切さなどを体感しました。

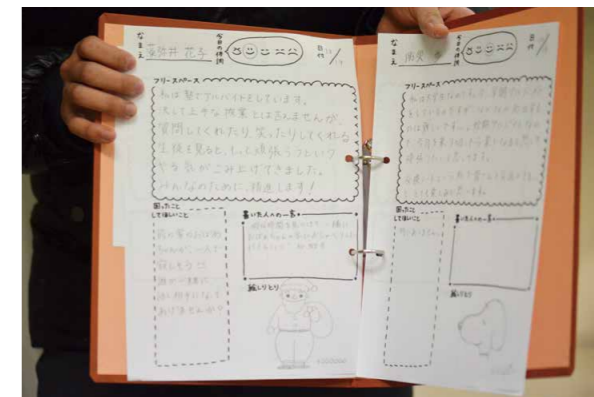
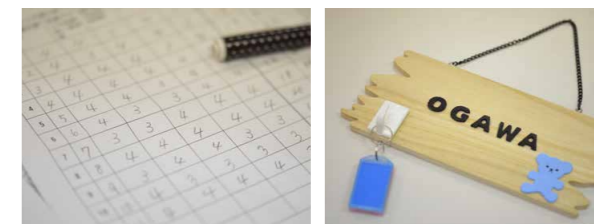


◎成果発表会 (12/24)



今年度の活動の総決算として、成果発表会を開催しました。1年生全員参加のプレゼンテーションを行うため、学内8つ

の会場で予選会を実施。学生たちによる相互採点により選抜された1チームが本選へ勝ち進みます。地域ジュニア、防災ジュニアの2会場に分かれて行った本選では、代表チームのプレゼンが始まるとステージも会場も真剣そのもの。狭小な仮設住宅のスペースを有効利用する収納方法として、防災グッズを収納するダンボール椅子や、仮設住宅のコミュニケーションを促進するための表札のほか、買い物に出られないお年寄りのために学生たちが訪問販売を行うなど、さまざまなアイデアが飛び出しました。



Report

[活動報告]

「熊本の復興をファシリテート！ ジュニア520人・104チームと挑む熊本地震」

もやいすとシニアの活動

地域リーダーには、利害の異なるさまざまな人たちの間を取り持ち、それぞれに共通の認識を生み出し、協働関係を構築する能力が求められます。同時に、地域の中にとどのような課題やニーズが存在しているのかを抽出し、解決可能な問いへと鍛え上げていく能力も必要です。今年度の「もやいすとシニア育成」が目標として掲げていたのは、地域リーダーに求められる2つの基礎スキル(①リーダーシップと合意形成能力、②調査技法)を身につけること。地域社会と関わりを持ち、もやいすとジュニアに対するファシリテーションで実践の機会を重ね、次のステップである「もやいすとスーパー」に向け、さらに学びを深めていきます。

実際の活動について

◎オリエンテーションおよび ファシリテーションガイダンス・演習 (7/4、7/11、7/18、7/25)



希望者を対象に、もやいすとシニア育成のためのガイダンスを実施しました。チームビルディングとファシリテーションに関する講義など、2回のガイダンスを経て、今年度のもやいすとシニアに参加表明してくれた学生は計18名。4～5人で1組のシニアチームを編成し、12チームほどのもやいすとジュニアのファシリテートをします。シニアの活動を支えるのは、「もやいすとスーパー(SA*)」の学生たち。さらにSAを教員が支えるという4つの階層構造で、熊本地震の復興支援活動に挑むことになりました。

※SA...Student Assistantの略



◎被災地フィールドワーク(9/10)

仮設住宅での聞き取り調査など益城町におけるフィールドワークを行いました。事前に熊本大学の円山琢也准教



授をお招きし、益城町の仮設住宅で行う調査の概要とその意図について解説をしていただきました。さらに益城町総合体育館の見学や、各シニアチームに分かれて担当エリアの周辺調査を行った後、木山団地やテクノ団地での聞き取り調査にも参加しました。

最後は、本学居住環境学科の佐藤哲准教授から仮設住



宅についての講義を受けました。避難所などを経て、いろいろな地区から人が集まる仮設住宅の居住環境やコミュニティづくりの大変さなどを考える機会となりました。

◎特別演習、ファシリテーション演習 (9/23、9/29、10/17)



11/23に、ジュニア向けワークショップとして行う「復興フューチャーセッション」「クロスロード」のツール開発のためのガイダンスを実施しました。シニア自ら実際にクロスロードとフューチャーセッションを体験するとともに、模擬発表を行いました。模擬発表には、サポートとして加わっていたSAだけでなく、シニア内でも盛んな意見が交わされました。これを経て、チームごとにクロスロードやフューチャーセッションといった復興支援ツールを開発し、11/23に向けたコンペティションを実施しました。



◎復興フューチャーセッション、 クロスロードのファシリテート(11/23)

もやいすと(地域/防災)ジュニアの復興フューチャーセッション、クロスロードにファシリテーターとして参加し、開発した復興支援ツールを用いた演習を実施しました。



◎成果発表会のサポート(12/24)



早朝から準備をはじめ、各教室で予選として行われた班別発表会や、本選となる全体発表の司会のほか、会場運営などに携わりました。約520人の1年生を率い、予定とは大きく違うカリキュラムで実施を余儀なくされた今年度のもやいすととの取り組みでしたが、これをやり遂げたシニアの学生たちにも、大きな達成感が得られたようでした。

